京都新聞　2023年(令和5年)6月20日　火曜日

聞こえに多様性

分かり合いたい気持ちが大切

聞こえとコミュニケーションについて学ぶ講演会が京都光華女子大（京都市右京区）で開かれ、健康科学部医療福祉学科言語聴覚専攻准教授の高井小織さんが「きこえの多様性」と題して話した。（稲庭篤）

京都光華女子大准教授 高井小織さん講演

講演する高井小織准教授（京都市右京区・京都光華女子大）

難聴には、外耳または中耳の損傷や閉塞によって生じる「伝音難聴」と、音を感じとる内耳や聴神経・脳の問題によって生じる「感音難聴」がある。伝音難聴は治療が可能な場合が多く、補聴器の効果も高いが、感音難聴は音がゆがんだり、うるさく感じたりして補聴器の効果が小さい場合がある。

言語の獲得は「耳で聞く」「口でしゃべる」「目で文字を見る」「手で文字を書く」の順番で行われる。聞こえに障害があると、言葉の獲得に遅れが生じてしまう恐れがある。

高井さんは、生後数日の新生児を対象とした聴覚スクリーニング検査を紹介。「リファー（要精査）」になれば精密検査が必要になる。「若いお母さん、お父さんにはショックだが、医師や先生、先輩たちがいる。支援や療育につなげることが必要」とし、「大切な検査なので全額補助を願っている」と話した。

「きこいろ」ホームページ

高齢化、増える難聴

子どもの中耳炎への注意も求めた。幼児と高齢者に多いが、難聴の原因となる。「周りの大人が気を付けてほしい」とし、耳かきについても「子どもは入り口をそっと拭くだけでも大丈夫」とアドバイスした。

高齢化社会が進み、難聴も増えている。60代後半の3人に1人がひそひそ話（25デシベル）が聞こえない「軽度難聴」以上で、75歳を超えると7割以上になる。静かな会話（40デシベル）ができない「中等度難聴」になれば補聴器の活用が推奨されているが、日本では装着率は低い。大きめな声の会話（70デシベル）ができない「高度難聴」でないと聴覚障害と認められず、補聴器の助成が受けられないことも背景にある。

突発性難聴の女性を主人公とした動画。「きこいろ」ホームページから視聴できる

雑音困惑「片耳難聴」／言葉に聞こえづらい「隠れ難聴」

高井さんは片耳難聴で、片耳難聴者団体「きこいろ」の副代表を務めている。片耳難聴は音の方向が分からず、雑音や騒音があると聞こえづらくなる。片耳難聴について解説する動画を紹介、コミュニケーションに向けた理解を求めた。

また、音が聞こえても言葉として聞き取りにくい「隠れ難聴」や、聴覚情報処理障害（APD）について、症状として認められ、研究が進んでいる現状を説明。言葉が伝わらないのは「（本人が）集中していないからではない」と理解を求めた。

高井さんは「人生さまざまな時期に聞こえのリスクがある」とし、普段は当たり前のことで思いが及ばない聞こえに関心を持ってほしいと訴えた。「コロナ禍以降、多くの人がコミュニケーションに伝わりにくさを感じている」とし、うなずくことや表情やジェスチャーへの意識などを求めるとともに、「一番大切なのは、相手や社会とつながりたい、分かり合いたいというあなたの気持ちです」と話した。

講演会は京都光華女子大の公開講座「すべての人が健やかに暮らせるウェルビーイングな未来に向けて」の一環。来年2月まで開講。日程や申し込みは同大学ホームページで。

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます。
著作権は、京都新聞社またはニュース配信元である通信社、情報提供者に帰属します。